

30年を顧みて

本田 英三

草創期のSPF豚

1960年農林省家畜衛生試験場において波岡博士等の指導のもと子宮切断法によりSPF豚が作出されてから約30余年、曲折はあったもののよくここまで発展したものであります。30年間は長くもあり、また短くもあった期間でした。

当初は子宮切断設備、特に育成設備が家畜衛試以外になかったのですべてこれを利用してもらったのでありますが、育成設備が少なかったので1ヵ月1、2頭より子宮切断ができず細々と発足したのであります。SPF豚研究会のメンバーは十数社でありましたがなかなかGGP農場建設に踏みきれず、結局味えさ（現在のシムコ）の浪江農場、住畜の鬼怒川農場、千葉県3ヵ所のみとなりました。

これはGGP農場からPS豚を出荷するためには3、4年かかり、それにCM農場は新設が要求され枝肉出荷までに一年の空白期間があるため、それをどうするかといった問題があったため各社とも二の足を踏むことになったのであります。

ところでSPF豚を開発されたヤング博士の地元ネブラスカ州など近隣の州はどうかというと、評価は賛否両論に分かれており飼育数もそんなに多くありませんでした。これはSPF豚の推進母体が獣医師協会であり登録料が高額であったためと、アメリカの土地が広大であるため農家がSPF化のような面倒な手段を必要としなかったためであります。日本の関係者はこれを見てSPF

豚の作出は必要がないと極言する人まで現れるに至り、前途の多難が予想されました。

各社は原因が判っていましたのでそんな言に惑わされることなくSPF豚化の事業を推進したのであります。CM農場の建設もはかばかしくなくGP農場も足踏み状態であったためSPF豚のPS母豚のシェアは全国母豚数の10%に置きました。当時の全母豚数は110万頭前後でありましたので11万頭という数字は気の遠くなるようなもので、関係者は一応目標ということにして内心は無理だと考えていました。それが現在は13%ですから夢が夢でなくなりました。もっとも平成7年の母豚数は97万頭でありますから漸く目標に到達したということになります。一步一步の前進で30年間の結果でありますから将来飛躍的に増加するかという問題があります。

SPF豚化の阻害要因

SPF豚推進を阻む理由は次の二点であります。まずそのひとつに環境規制の強化という問題があります。清浄化ということは必要であります、あまりに規制が強化されると豚舎の立地条件がますます狭められます。糞尿処理もその一つであります。

BODに対する国の基準は比較的緩やかであります。が県によっては20ppmあるいは10ppmであり、それに周辺の同意という項目が加わるとCM農場は勿論のことGP農場を新たに建設すること

は事実上不可能に近くお手上げの状態であり
ます。新設農場ができなければSPF豚も増加し
ないのでありますから、一般豚の豚舎をどのよ
うにしてSPF豚舎に転換させるかということに
なります。一部で実施されていますが問題が
残ります。

次はGGP農場、GP農場の建設に対する投
資の問題であります。最近の実例では数十億
円の資金が投じられています。GGP 1頭か
らPS豚を出荷するまでに2、3年かかり、
厳密に選抜するとPS豚は多くても20頭前
後しか出荷できず経費がかかるわりには酬
われません。こんなところにPS母豚の飛躍
的な増加が見込めない隘路があったのであ
ります。

生産費低下のための方策

それではどうしたらよいのか。解決方法は
ただ一つ。国の公的資金の導入であります。
国債残高が240兆円もあるのに民間で組織
されている団体に補助金を支出することは
できないと拒否されるでしょうが、米の輸
入対策費には6兆円が支出されます。しか
し米価は高値のまま下がらない。一体何の
ために支出を決定したのか効果に疑問符が
つきます。また種豚登録協会へは年間数億
円の補助が出されています。したがって対
策費の何分の一の金額が出せないはずが
ないと考えます。昔は農林省家畜改良課が
SPF豚は改良に役立たない等の理由でな
かなか認知してくれず、学術会議で議題
に上っても推進に力を貸してもらえなかつ
た時代もありました。しかし30年経った
現在では風向きが変わって、農水省も日
本の養豚はSP化しなければならぬと意
識の変化が見られるようになりました。好
機逸すべからず、全農をも含めた関係者
は今こそ補助金獲得の運動を起こすべきで

あります。仮に種豚に補助があると子豚の
価格が安くなり必然的に枝肉価格に影響し
国際競争力がつくので養豚家は安心して
生産に専念できます。今のままでは憂慮す
べき事態を招来することになりかねませ
ん。

資質改良のための雄豚

価格もさることながら肉質も重要な問題
であります。本誌第8巻に総食・根本社長
が発表されていますが、20年前はSPF豚
の歩留まりは35%ロースの芯はあるか
ないぐらいバラ肉二枚取るのがやっととい
う情けないものが一部出荷されたことも
あったでしょう。SPF豚はもともと閉鎖
された環境で飼育されますのでともかく
近親交配に陥りやすく、当時は厚脂と
ロース断面積の改善に必死でした。種豚
の増加を急ぐあまり淘汰しない不良豚が
出荷されたものと思われます。現在は数
万頭の母豚が飼育されているのでこんな
心配はありませんが、資質の改良のため
には常に心がけなければならないこと
であります。

GGPからPS生産のためにはランドレース
と大ヨークシャの交配が一般的でありま
すが、近年国内の種豚生産農家は極端に
減少しています。特に大ヨークシャ、
デュロックの優秀な血統保持者がなくな
っているのが現状であります。静岡県中
小家畜試験場において大ヨークシャの系
統造成が完了したとのことではありますが
喜ばしいことでもあります。

しかし最近の枝肉の傾向から見ると岡目
八目ではありますが、大ヨークシャの血
液更新が十分ではないような疑問を持
ちます。これはデュロックにも同様のこ
とがいえます。血液の更新のための種
豚は現状のSPF豚種豚群の能力や成績
より常に

高い能力と資質のものが必要となりますが、国内での調達が果たして可能であるか疑わしいのであります。

もともと大ヨークシャ、デュロックはアメリカより輸入したものでありますから輸入に依存すればよいのであります。価格の面とか疾病の問題とかいろいろと障害があります。かつてオーエスキー病は真偽は別としてハイポ豚が持ち込んだとも言われたこともありますのですべて輸入に直結することは危険であり、それなりの覚悟が必要であります。

以前は雄はハンブシャ種が主流であった時代がありました。しかしフケ肉等の問題もあり成績が今一つだったので、十数年前たまたま豚の品種の輸入が解禁された機会にデュロックを50頭程試験的に輸入したのが今やCM農場の代表的な雄豚になったのでありますから、今さらランドレース、大ヨークシャ、デュロックの組み合わせを変えることはできないでしょう。

背脂肪、ロースの断面積等SPF豚も避けて通れない問題であります。それだからこそGP農場は基礎豚としての雄の選抜に一層の留意が必要であり、血液更新に慎重に対処してほしいものであります。

受精卵移植と冷凍精液

SPF豚は特定病菌を排除して作出されたものであるから、一般のCM豚に比較すると増体量飼料要求率事故率等いずれもすぐれており競争力がありますが、それは国内対比であってそれだけでは外国産の豚肉価格には通用しません。そこでコストダウンの一つの手段として登場するのが受精卵移植と冷凍精液であります。受精卵移植につい

ては千葉県畜産センター養豚試験場の宮原氏が発表されていますが、受精卵を介しての疾病伝播の有無の確認、受胎率、術式およびその取り扱い等の課題に若干問題が残されているということでもあります。技術的には完了しているのでありますから後は受胎率を高めることに注力すればよいので一層の研究を期待します。

冷凍精液については十年ほどまえに東京農大で研究されていましたが、現在では静岡大学で実験を完了実用化に踏出していますが、精液については受精卵移植と同じく疾病伝播の問題があります。豚と牛とは同じではありませんが牛の場合は冷凍精液が輸入され使用されています。豚にも利用する方法があるはずでありますから組織の固定化を望みます。国内の冷凍精液はすでに利用されていますが、種の保存といった消極的な目的でなしにもっと積極的に活用すべきではないでしょうか。先進技術の利用にはとかく躊躇するものがありますがGP農場には特に採用してほしいものです。

SPF豚肉のPR

最近、日本食肉消費総合センターがテレビで豚肉のコマーシャルを流しておられますが今一つ迫力に欠けているように思われます。メディアの影響は想像以上に大きなものでありますからO-157に揺れている昨今、SPF豚の肉が高品質で安心して食べられることを宣伝してはどうでしょうか。いささか便乗しすぎかもしれませんが消費者はSPF豚のことをあまりにも知らなさすぎました。以前、SPF豚には検定制度が確立していないのでSPF豚とは認められないと発言された人がいましたが、幸い現在ではGGP農場は勿論のことCM

農場まで認定され、その数も徐々に増加しております。

胸を張ってSPF豚肉の良さを宣伝すべきであります。30年来生産の向上一辺倒で走り続けてきたSPF豚関係者も、ここから消費者に対するPRを

精肉小売店まかせでなく自らの手で啓蒙すべき時期にあると思います。根本社長のように努力される人が数百人、数千人と増えればその時こそ日本全国にSPF豚の評価が高まるでしょう。

ブタ・ア・ラ・カルト



マンガリッツァ Mangalitsa

ハンガリー原産の脂肪の付きやすい豚。品種名はロムニ語で「食べる」という意味の「mancare」に由来している。冬季に縮れた厚い冬毛が全身を覆う。耐寒性の強い品種。晩熟で一腹産子数が6～7頭と少なく、東欧諸国に分布するが飼育数は激減している

(写真・解説：正田陽一)